

森谷秀亮年譜

明治三十年（一八九七）誕生

五月十七日、森谷秀一郎の長男として北海道空知郡美唄村（美唄市）に生る。父は宮城県伊具郡の人、死後筐底から自叙伝を発見したが、冒頭家系を記し「高曾祖父の頃より仙台藩主伊達氏の家老として角田三万石を領せる石川大和守の家臣として大番士を勤め、士格の末班に列し五人扶持を給せらる」と述べている。また明治十六年九月上京して陸軍教導団歩兵科に入隊し、翌年業を卒えて歩兵伍長に任ぜられ、仙台鎮台（第二師団）に勤務したが、間もなく退役を出願、渡道して北海道庁に奉職したことを述べている。

同 三十七年（一九〇四） 七 歳

四月一日、高島郡高島村（小樽市高島町）尋常小学校入学。のち札幌創成尋常高等小学校に転学す。

小学校入学の時、日露戦役が勃発す。子供心にうけた興奮感銘は終世忘れることができない。

同 四十四年（一九一一） 十四 歳

四月一日、庁立札幌中学校（札幌第一中学校・札幌南高等学校）入学。

国語・漢文・歴史を嗜み、家蔵の博文館発行帝国文庫を乱読す。当時道内には文科系の大学がなく、東京遊学を決意す。

大正 五年（一九一六） 十九 歳

九月十一日、第一高等学校第一部乙類（文科）入学。

当時一高には日本史の授業がなく、西洋史の斎藤阿具、東洋史の箭内互の両教授の講筵に列して深い影響をうけ、大学では歴史を専攻することを定める。

同 八年（一九一九） 二十二 歳

九月十一日、東京帝国大学部国史学科入学。三上参次・田中義成・萩野由之の三教授、黒板勝美・辻善之助の両助教に師事す。

第一次世界大戦を契機としてわが産業界は一大躍進を遂げ、高等学校から大学文学部に進む者が激減し、国史学科二名、東洋史学科・西洋史学科皆無という奇現象を呈す。在学中、大学・専門学校の学年も、中小学校と同じく四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終ることに変更される。

同 十一年（一九二二）二十五歳

五月二十四日、さきに「奈良朝時代を中心とする寺領の研究」の卒業論文を大学に提出したが、三上主任教授の推薦により維新史料編纂事務局（文部省所管）に勤務することとなり、是日、維新史料編纂官補に任ぜらる。編纂第四部（主任、維新史料編纂官藤井甚太郎）にあつて、明治二年正月から同四年七月に至る間の維新史料の蒐集編纂に従事す。月俸七十五円。

維新史料編纂会・維新史料編纂事務局の庁舎は、麴町区三年町虎の門（千代田区霞が関）の旧工部大学校にあつて、宮内省図書寮・諸陵寮および東京女学館と隣り合っていた。現在虎の門一帯は変貌甚しく、外濠と石垣で堅められている高台に威容を誇る赤煉瓦の史局の俤は、とうてい偲ぶことができない。

同 十四年（一九二五）二十八歳

五月十四日、仙台市南町小西儀助六女はま（明治三十八年六月二十五日生）と結婚。麻布区今井町に住み、のち豊多摩郡杉並町阿佐ヶ谷六丁目に移る。

同 十五年（一九二六）二十九歳

五月九日、長女倭文子生れる。昭和三年一月二十九日、長男亮一生れる。

昭和 四年（一九二九）三十二歳

九月六日、維新史料編纂官に任ぜられ、高等官六等に叙せらる。十月一日、正七位を授けらる。二十一年十二月二十八日正五位に陞る。

このごろ豊多摩郡井荻町荻窪二丁目の内外書籍会社川俣馨一の貸家に移り、のち買得す。

同 十年（一九三五）三十八歳

三月三十日、国学院大学講師を委嘱される（十八年三月三十一日辞任）。十二年四月一日、法政大学講師委嘱（二十年六月三十日辞任）。十八年四月一日、東京高等商船学校講師委嘱（十九年三月三十一日辞任）。

同 十一年（一九三六）三十九歳

八月三日、父秀一郎歿（七十二歳）。十八年四月九日、母せい歿（六十九歳）。多摩墓地に埋葬。

同 十三年（一九三八）四十一歳

三月九日、勲六等に叙し瑞宝章を授けらる。十七年五月十二日、勲五等に陞る。

同 十七年（一九四二）四十五歳

三月三十一日、維新史料編纂官を免ぜられ、維新史料編纂事務を嘱託される。

維新史料編纂に関する官制は明治四十四年五月七日公布され、大日本維新史料稿本 四一八〇冊の編纂を終え、維新史六卷・概観維新史一卷・維新史料綱要十卷・大日本維新史料十九卷（未完）を出版して、昭和十七年五月七日官制廃止となる。

六月一日、日本文化大観編修事務を嘱託される。

政府は紀元二千六百年記念事業の一として日本文化大観（歴史篇二卷・現勢篇一卷・図録三卷）を編纂出版することとなり、文部省教学局が事務に当った。十七年十二月、歴史篇第一卷（古代・中世篇）が刊行されたが、大東亜戦争の激化とともにその後の行程が遅れ、ようやく二十年五月、全原稿の補訂を終え内閣二千六百年祝典事務局に提出した。しかし、

旬日後の大空襲で烏有に帰す。

同 二十年（一九四五）四十八歳

七月十日、福島師範学校教授に任ぜらる。戦後の食糧難・住宅難に悩まされ、預金封鎖で筭生活に喘ぐ。

同 二十一年（一九四六）四十九歳

八月八日、教職適格審査に合格。

同 二十四年（一九四九）五十二歳

六月三十日、福島大学教授に任ぜらる。学芸学部勤務。

同 二十五年（一八五〇）五十三歳

五月三十一日、新潟大学教授に転じ人文学部に勤務す。信濃河畔上所島の大学官舎に住み、ようやく住宅難から解放される。史学科の主任教授として教官陣容の整備、研究施設の充実を図り、かつ新潟史学会を組織して地方文化の向上に微力を捧げる。

同 二十八年（一九五三）五十六歳

二月一日、新潟県の委嘱により県議会史の編纂に従事す。三十六年三月三十一日、執筆完了を告げ辞任。

同 三十六年（一九六一）六十四歳

十月二十八日、中国東亜学術研究計画委員会の招聘、東方学研究日本委員会の推薦により、中華民国の首都台北市に赴き、金山街一卷十五号を仮寓とする。国立台湾大学（旧台北帝国大学）文学院の客員教授として日本通史週三時間、日本近代史週四時間の講義を行うかたわら、台湾に残存する日本関係史料の調査を行う。翌三十七年七月四日帰国。

同 三十七年（一九六二）六十五歳

十一月三日、教科用図書検定調査審議会（文部省）委員を委嘱される。五十年十月三十日辞任。

同 三十八年（一九六三）六十六歳

四月一日、新潟大学を停年退職し、東京家政学院大学教授に就任す。翌年七月六日、三鷹市大沢二丁目十五番十六号の新居に移る。

同 四十年（一九六五）六十八歳

四月一日、立正大学講師を委嘱される（四十三年三月三十一日辞任）。四十一年四月一日、法政大学講師委嘱（四十六年三月三十一日辞任）。

同 四十一年（一九六六）六十九歳

四月一日、駒沢大学大学院・文学部教授に就任す。

同 四十二年（一九六七）七十歳

一月十日、維新史料局勤務時代の同僚丸山国雄・藤井貞文・小西四郎・吉田常吉の四氏と計り、東京大学出版会の協力を得て、日本史籍協会叢書の復刻を企てる。四十九年十二月、百九十二巻の刊行を終る。五十二年八月、野史台維新史料叢書四十巻の復刊も完了し、続日本史籍協会叢書の刊行に着手す。十一月三日、勲三等に叙し、旭日中綬章を授けらる。

同 四十三年（一九六八）七十一歳

四月一日、靖国神社の委嘱により靖国神社百年史の編纂に従事す。

同 四十四年（一九六九）七十二歳

三月二十日、是より先、東宮御所に伺候、皇太子殿下に明治維新史を御進講すること十回を算える。是日、御所において御晩餐の御招待に預る光榮に浴す。

同 五十年（一九七五）七十八歳

三月三十一日、駒沢大学を停年退職、以後老軀をひっさげて靖国神社百年史の完成に努める。

森谷秀亮教授著作目録

著 書

書 名

発行年月 発行所

『条約改正』	(岩波講座『日本歴史』所収)	昭和九年二月	岩波書店
『明治時代史』	(『綜合日本史大系』第十二卷)	同 九年三月	内外書籍会社
『明治維新史』	(『歴史教育講座』所収)	同 十年四月	四海書房
『皇政維新時代』	(『大日本国民史』第十卷)	同 十二年五月	太陽閣
『開国より維新へ』	(文部省推薦図書)	同 十七年七月	秋津書房
『新潟県議会議史』		同 三十二年三月	新潟県
同 右		同 三十六年十月	同 右
『明治維新』	(『日本歴史 全集』第十四卷)	同 四十四年十月	講談社
『靖国神社略年表』		同 四十八年七月	靖国神社

論 文

『北海道屯田兵制の概観』	(『歴史地理日本兵制史』所収)	大正十五年三月
『東京奠都に関する一考察』	(『史学雑誌』三七ノ五)	同 十五年五月

- 「再び北海道屯田兵制に就いて」 (『歴史地理』四八ノ一・二) 同 十五年七・八月
- 「板垣退助の階級論」 (『明治文化研究』二ノ四・五) 同 十五年 八月
- 「南貞助自伝宏徳院御略歴」 (『明治文化研究』三ノ九) 昭和 二年 十月
- 「明治維新研究に関する日本文献」 (史学会論『明治維新史研究』) 同 四年十一月
- 「征韓論の分裂」 (『歴史公論』二ノ一) 同 四年 一月
- 「勝 海 舟」 (『歴史公論』二ノ七) 同 四年 七月
- 「明治集権政府の成立と変遷」 (『歴史教育』八ノ一二、九ノ二・三) 同九年三・五・六月
- 「欧米諸艦隊の極東進出」 (『歴史公論』三ノ七) 同 九年 七月
- 「明治維新の解釈に就いて」 (『歴史地理』六五ノ一) 同 十年 一月
- 「征韓論分裂の真相」 (『史 潮』五ノ一) 同 十年 三月
- 「明治新政府に於ける諸勢力の消長」 (『歴史教育』一一ノ一) 同 十一年 四月
- 「維新史料の編纂事業に就いて」 (『文部時報』五八八・五九二・五九四) 同十二年六・七・八月
- 「明治大正時代研究上の重要点と其方法」 (『歴史公論』七ノ四) 同 十三年 四月
- 「大政奉還と將軍職の辞退」 (『植木博士還曆記念国史学論集』) 同 十三年十二月
- 「岩倉全権大使の米欧回覽」 (史学会編『東西交渉史論』) 同 十四年 五月
- 「幕末維新文化の特質、政治及び政変」 (『日本文化史大系』第十一卷 誠文堂
新光社) 同 十五年 三月
- 「陸奥宗光蹇蹇録」 (岩波文庫版) 同 十六年 七月
- 「小御所の公議について」 (『福島大学学芸部論集』) 同 二十五年 三月
- 「大政奉還と將軍職の辞退」 (旧稿の全文改訂) (『新潟大学人文科学研究』二・四) 同二十六年十二月、二十七年十二月

- | | | | | |
|------------------|-------------------|---|------|----|
| 「幕府の滅亡」 | （『日本文化大系』第十卷小学館） | 同 | 三十二年 | 五月 |
| 「中華民國台湾省に使用して」 | （『日本近代史学』五） | 同 | 三十九年 | 三月 |
| 「真木和泉守と明治維新」 | （『神道史研究』一二ノ二・三・四） | 同 | 三十九年 | 七月 |
| 「近代日本史の諸問題」 | （『歴史教育』一三ノ二） | 同 | 四十年 | 二月 |
| 「明治初年における府藩県三治制」 | （『駒沢史学』一四） | 同 | 四十二年 | 四月 |
| 「王政復古大号令の渙発」 | （『駒沢大学文学部研究紀要』二五） | 同 | 四十三年 | 三月 |
| 「戊辰戦争について」 | （『軍事史学』五ノ一） | 同 | 四十四年 | 五月 |

日本史籍協会叢書解題

- | | | | |
|------------|---|---------|----|
| 『藩制一覽』 | 同 | 四十二年 | 四月 |
| 『米沢藩戊辰文書』 | 同 | 四十二年 | 七月 |
| 『昨夢紀事』 | 同 | 四十三年 | 九月 |
| 『岩倉具視関係文書』 | 同 | 四十四年 | 二月 |
| 『川勝家文書』 | 同 | 四十五年 | 六月 |
| 『九条尚忠文書』 | 同 | 四十六年 | 十月 |
| 『所司代日記』 | 同 | 四十七年 | 六月 |
| 『伊達宗城在京日記』 | 同 | 四十七年十二月 | |
| 『百官履歴』 | 同 | 四十八年 | 七月 |
| 『戊辰日記』 | 同 | 四十八年十一月 | |

『再夢紀事・丁卯日記』
『続再夢紀事』

同 四十九年 五月
同 四十九年十一月

日本史籍協会叢書別篇解題

『野史台維新史料叢書』 一 「公文」
同 右 二 「論策」
同 右 十二 「伝記」 三
同 右 三十一 「戦記碑文」
同 右 三十 「維新之源・新撰組始末記」

同 四十七年十一月
同 四十八年 四月
同 四十八年 八月
同 四十九年十二月
同 四十九年 四月

随筆その他

「岩倉具視」 (『中央史壇幕末明治人物史論』)
「台湾琉球を旅して」 (『温知会講演速記録』四六)
「国際関係の調整と近代国家への進展」 (『歴史教育』一一ノ八)
「日清日露戦役の社会に及ぼせる影響」 (『歴史教育』一二ノ七)
「神武創業と明治維新」 (『歴史教育』一四ノ一一)
「新潟県大郷村誌序」
「郷土新潟の発刊を祝す」
「明治維新の性格」 (『日本教師会教育と教師』)

大正 十五年 九月
昭和 九年 五月
同 十一年十一月
同 十二年十一月
同 十五年 二月
同 三十一年 九月
同 三十八年 三月
同 三十八年 七月

「明治の人物岩倉具視」	(明治神宮代々木)	同	三十九年	二月
「同 板垣退助」	(同 右)	同	四十年	三月
「明治の事件 版籍奉還と廃藩置県」	(同 右)	同	四十一年	三月
「幕末の人物 梅田雲浜」	(同 右)	同	四十二年	六月
「同 坂本竜馬」	(同 右)	同	四十二年	十一月
「明治百年の歴史」	(日本工業倶楽部における講演速記)	同	四十三年	四月
「新潟開港百年史監修の辞」		同	四十四年	三月
「家永教科書を弾劾する」	狂った歴史教育	同	四十四年	九月
「岩倉の孝明帝毒殺説」	(『文芸春秋』増刊明治維新)	同	四十八年	一月
「大日本人名辞書復刻版刊行の序」		同	四十九年	六月